詠む広場

毎日俳壇

西村　和子　選

どんど爆ぜ人の輪一歩二歩下がる　奈良市　上田　秋霜

△評▽正月のしめ飾りや松飾りを焼くどんど火は、竹がはじけることがよくある。「二歩」目に現実感と、迫真性がある。

春ショールふわりと羽織り助手席へ　葛城市　山中　由子

△評▽防寒のためのショールではない点に、おしゃれ心と浮き立つ思いが託されている。

飼い主に似て哀れやな猫の恋　彦根市　馬場　雄山

母郷とは母の眠る地冬北斗　沼津市　川井大次郎

集まれば皆八十路なり女正月　大　阪　井口千賀子

寺の子に挨拶さるる春隣　横浜市　相沢恵美子

春寒や水にまぎれぬ墨の帯　川越市　益子さとし

あちらかと思えばこちら初燕　枚方市　門川　清秀

突き進む郵便バイク雪しまく　盛岡市　福田　栄紀

春の星励ますやうに瞬けり　河内長野市　守口　幸子

井上　康明　選

火の色のまぶたに在りて野焼き果つ　直方市　岩野　伸子

△評▽朝から野を焼き、果てまで焼いて終わりにさしかかる頃、野を焼いた人のまぶたは、熱せられて赤くほてっているだろう。

仏壇の横に神棚春の雪　有田市　谷中　節子

△評▽神をまつり先祖をしのぶ明け暮れに清らかな春の雪が降る。何代も続く歴史ある家を想像した。

震災の地に石仏いぬふぐり　高松市　島田　章平

花すみれひかる野面や龍太の忌　甲府市　清水　輝子

馬に逢ひ馬を眺めてうららけし　浜松市　野畑　明子

積む雪に抑え込まれし都心かな　西海市　まえだいっそう

風孕む巫女の袴や花辛夷　国分寺市　野々村澄夫

春浅し母の面会解禁日　にかほ市　金　民子

鳥雲に骨董店に羅針盤　中間市　恵　英次郎

二三日泊つてゆけと春の雪　南房総市　山根　徳一

片山由美子　選

一本にして紅梅の庭となり　和歌山市　中筋のぶ子

△評▽「紅梅の庭」という断定に説得力がある。一本を「ひともと」と読めば、古典以来の季語にふさわしい趣のある句となる。

急行の停らぬ駅に燕来る　枚方市　門川　清秀

△評▽急行は停車しない駅だが、毎年やってくるツバメが子育てをする様子が見られそうだ。

開拓の村は無人に霜の花　津山市　岡田　邦男

寄鍋や昭和の話ひとしきり　東　京　徳原　伸吉

房総は日を呼ぶところ金盞花　神戸市　橋口　正子

臘梅の花咲く駅に降り立ちぬ　奈良市　上田　秋霜

自転車の生徒の列の息白し　川口市　高橋さだ子

着ぶくれのごった返すや二日市　小林市　黒木　暢

坂多き街に住みたるミモザかな　福　岡　手島喜美江

寛解を不意に告げられ木の芽風　国分寺市　野々村澄夫

小川　軽舟　選

初蝶の視線集めて去りにけり　北本市　三宮　悦子

△評▽作者も視線を向けた一人なのだ。まるで人の視線を意識しているかのように飛びめぐる初蝶が小憎らしく見える。

新しき床屋を探す春隣　我孫子市　矢澤　準二

△評▽なじみの床屋が店を閉めた。いい床屋が見つかるか。季語の春隣には期待感がある。

夕暮れの待ち合わせなり花八手　いわき市　織内あさ陽

湯湯婆や裏木戸鳴らす風の音　行田市　吉田　春代

教へ子のレジきびきびと燕来る　朝倉市　鳥井てんせき

凍晴の由布岳望みシーツ干す　北九州市　田中　裕子

冬日差す看取りの部屋の魔法瓶　加古川市　伏見　昌子

房総を走るバイクや春近し　伊賀市　福沢　義男

先頭に子犬と子供息白し　龍ケ崎市　小宮　光司

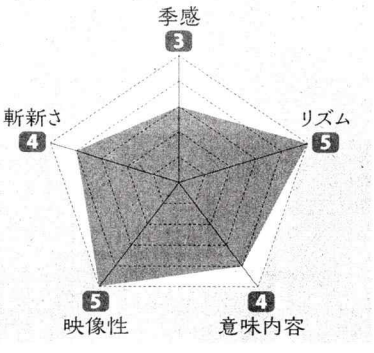
風の音鳥の声なく雪の朝　茨　城　杉山　満

俳句てふてふ　注目の一句

円堂実花

冬晴や富士に見られて登る坂　wacoco

チャートで採点



季語「冬晴」の一句。登っているのは、どこかの富士見坂でしょうか。富士山を見ていると同時に、富士山に見守られているという感覚は、多くの日本人にとって受け入れやすいものでしょう。

長らく山が信仰の対象とされてきた日本には、数多くの霊峰があります。富士山はその筆頭で、2013年には「富士山―信仰の対象と芸術の源泉」として世界文化遺産にも登録されました。

孤立峰で長くなだらかな裾野を持つ富士山はどの季節に見ても秀麗ではありますが、真っ白な雪を頂く時期の美しさは格別と言っていいでしょう。冬晴れの澄んだ青空を背に、ひときわ神々しさを増した姿が想像されます。（えんどう・みか＝俳人）

アプリ　俳句てふてふ

全国景勝地俳句コンテスト　俳句てふてふは富士五湖や耶馬渓など133景勝地にちなんだ俳句を募集中。1930（昭和5）年に高浜虚子選で実施した「日本新名勝俳句」の後継企画。選者は俳人の稲畑廣太郎さんと星野高士さん。詳しくはアプリ内の応募要項をご覧ください。

アプリのダウンロードはこちら